

資料 1

日本に於けるアナキズム運動の可能性と 我々の基本の方針 (一九七三年九月)

全関西 9・16 集会実行委員会
(小三木私案)

我々全関西 9・16 実行委は、この間の 9・15・16 に於いて、各地に於ける集会を主体的方向性をもって為しえたことを、我々アナキズム運動の発展にとつて、全面的に肯定的かつ前進的成果を獲得しえたと把握するとともに、それを踏まえた上で、全国の全てのアナキスト同志諸君、革命的無党派の諸君に対して更なる連帯の意を表明する。そして、それらの同志諸君に対して、我々は社会革命の前進へ向けて、献身的かつ革命的な闘いの深化を勝ちとられることを念願するとともに、我々を含めた全てのアナキスト、革命的無党派諸君の闘いに同志的連帯をされることを要請する。

さて、今回これら一連の集会を通して、我々が大衆的に明らかにしたいことは、各地においてそれぞれの地域的特殊状況の位相の差と、かつそれが故の我々内部の相互間における徹底した討議の欠落等の、若干の不充分性を有しながらも、大杉栄追悼 50 年という名目に利せられていたとしても、現在迄各個バラバラであった我々アナキズム陣営が、ともかくも今日的に全国的連合の可能性を獲得したということである。

すなわち、第二次大戦による日本国家主義の敗北、そしてその灰じんの中から不死鳥の如く結成され、後に不幸にも日本アナキスト・クラブ系の分裂を招来しながらも、一応アナキストの全国的連合として存在していた日本アナキスト連盟の一九六八年の崩

壊後、全国的反権力闘争の結集軸を喪失していた我々アナキズム陣営が、今回大杉栄追悼 50 周年集会を東京、長野、名古屋、京都の四地区に於いて、全国無政府主義者共同行動体制の確立というスローガンの下に、その他それ以外の多くの地方の同志諸君の協力の中で、一つの方向性を持って同時に貫徹しえたことは、今日の反権力闘争におけるアナキズム陣営のその現在の低迷状況を突破する方向性を獲得したことを意味するものと確認できる。それが故に我々は今日の時点において、我々がその目指すべき社会革命——無政府社会樹立へ第一歩を間違ひなく踏み出したのであり、そしてそのことは今集会における我々の技術的未熟性、主体的力量の不足、闘争主体の質的不充分性を補って余りあるものであると、我々は疑いもなく確認する。

しかしながら、問題はこれからである。我々は社会革命——無政府社会樹立へ向けて高らかに突撃ラッパを鳴した。それではこれから我々は何を為すべきか。そして何を為せるのか。全てはこれらの結果による。これらの結果によって我々の為すところは、一切が無に帰し、あるいは全的に開花するのである。

さて、我々が全国学園闘争の到達した地平に反スターリニズム運動の克服過程において登場し、日本におけるアナキズムの復権が大衆的に主張されはじめてから、早や五ヶ年もの歳月を費している。しかしながら、我々の闘いはその状態から一歩もまだ脱却しえていない。すなわち、我々は今日社会革命へのみるべき前進を獲得しえていないばかりか、今日の政治状況に対する有効な対応さえも確立されていないことに注目しなければならない。それは、我々の運動の多くが、一面的には自然発生性の状態にとどまっていたり、それとともにそれが故の地域的限界性に制約されていたことは否定できない。日本各地における多くの同志はそのような孤立的状況の中で、国家権力、マルクス主義諸党派の物理力の前に敗北させられてきた。

しかし、今日我々はそのような状況を突破し、憎むべき権力主

義者共を打ち砕き、国家解体、人間解放の大道を一步一步前進していかなければならない。我々には後退も停滞も許されない。唯一つ前進のみである。敗北の結果は確実に死であり、また、勝利に向ける過程の死が我々を待ち受けているかもしれない。しかし死自体には何も意味はない。我々は生きて、生きて生き抜かなければならない。例えいかにぶざまでも、屈辱的であつても、だ。何となれば死こそが敗北だからであるからだ。

では、集会の成果をふまえた上で、我々の今後の活動方針について述べるまえに、我々は先にも述べた如く、戦後日本におけるアナキズム運動は、ほとんどの地域において常にその地域、学園、職場等とのみ閉じこもつた形の、結果的には排他的な運動しかなしえていなかったという状況認識から出発しなければならぬ。例えば、我々は今日の時点において関西段階における、少なくとも京都段階においては、恒常的な運動体を保有しているわけであるが、その闘争状況はあくまでも京都—関西という地域的限界状況に規定されており、それが故に全国的状況に有効的に対応しきれず、闘争は個別的闘争に矮小化される傾向を有していた。すなわち、我々の終局目標たる反権力闘争—社会革命への展望をそこには一切保持していなかったし、持ちうるべきもなかったのである。それは我々の反権力闘争の拡大・深化を決定的にさまたげていた。それが故に、全国無政府主義者の共同行動体制の構築を目指して貫徹された今集会は、その意味においてまさしく、我々アナキズム陣営がその閉塞的状況を突破することにその立脚点があつたのであるし、また我々は今集会在がそれへ向けての第一歩を踏みだしたものであることを確信する。

また、今回の全関西9・16集会実行委員会の基調報告においてもふれてあるように、我々の運動（国家解体、権力解体）は、前にも述べた理由の故に、けつして個別的な地域、職場、学園の孤立的な闘いに終息されるべきものではなく、常に外へ向つて働きかけるといふ自己増殖性を有するものであるといふことを言葉

だけではなく、感性でもつて更にさらに確認しなければならぬ。すなわち、その運動原理を全く無視した排他的運動は、たとえ一時的には内実を伴っているかの如くみえ、闘争そのものに対する有効性を部分的にでも保持し、闘争総体の高揚をもたらしたとしても、それは最終的には有名無実のものとなる。それがいかに高い偉大なものを目指していたとしても、それが目指した彼岸とはほど遠い所へおいやられてしまふ。そればかりか、その敗北の結果登場するものによつて、その運動自体そのものの存在が結果的には革命そのものに対する障害物としてしか機能しえなかつたという悲惨な結果を生み出すことが必然的となるのである。

これらの運動の基本原理—運動の自己増殖性—を見過ごし、それを否定する時、全ての運動は、我々のアナキズム運動も含めて、それらは全てサークル主義的排他主義的御都合主義的なれあい主義的傾向をその必然的帰結として所有することになり、それらの結果は、国家・権力側からするならば、体制維持にとつて全く都合のよい、なまぬるい、なれあい主義的な、合法闘争以下の全くのお遊びグループ以外の何物をも生みだしえないことは、明白々々の事実であると我々は確信するのである。

我々はそれが故に、全国のアナキスト、革命的無党派の同志諸君に連帯を呼びかけるのである。我々は今日的には極少数派かもしれないが、我々が国家解体、人間解放への闘いの歩みを遅々としてでも闘いつづけるならば、我々が未来的多数派となることは、全く疑うところのない真実である。我々はここから出発しようではないか。そしてアナキズムという不可視の光に導かれて、無政府社会の樹立という永遠の彼岸へ向けて共に進んでいくのではないか。

さて、我々がこの集会の準備から集会そのものを通じて、そして今もなお全国の無政府主義者の共同行動体制の創出ということを中心に・スローガンとして掲げ、未来永劫に至る迄掲げることであろうことは実にこの為にある。そこにおいて主張されている

「闘いの結集軸」とは、一部の同志諸君が危惧されているような統一指導部の形成、運動の統一化という性質のものではない。それは、国家・権力によって日常的に国家性社会の中に、各個々人グループ相互の主体的意志とは全くかけはなれた所で、その体制の中にくりこまれ、囲いこまれていた我々が、我々アナキズム陣営内部の相互確認、すなわち、我々の権力解体へ向けた指向性を相互確認し、我々の闘いの個々が反権力闘争・社会革命へ向けて相互補完の不可欠な闘いであることを相互確認することを意味するのである。それは直線的にその延長線上にアナキスト連盟の必要性を主張するものではない。しかしながらアナキストの全国的連合体そのものの必要性を否定するものでも我々にはありえない。それは今日における我々アナキズム陣営の存在状況を客観的に把握するが故で、当面の戦術として、全国的無政府主義者共同行動体制の確立を指定するが故にある。まさに「闘いの結集軸」とは我々アナキズム陣営内部の自由連合の獲得そのものである。また我々はそれが故に、アナキズムの多様性と、それに伴う多様な戦術を否定するものではけつしてなく、全面的にそれを肯定的に把握するものである。しかしながら、今日の状況を鑑みると、自由連合主義に対する誤った認識から、アナキズム陣営内部において、特に自称個人主義者の中に、アナキズムの組織論としての自由連合主義の意味を正確に把握することができず、それをブルジョア的な自由分散主義とはきちがえていた傾向が存在するが、我々は明確にそれを全くの間違ひであると断言する。「求めるものは連帯であり、その方法は自由である」というアナキズム運動のスローガンは、それらのブルジョアの傾向を明確に否定している。

しかし、ここで我々は自由連合組織論の適用について更に考察する必要がある。一部の同志諸君は、自由連合を全ての反体制運動にまで拡大する。我々は彼等の運動の進展が結果的に我々の運動を促進させ、社会革命へのエネルギーとなることを全面的に否

定しない。しかしながらそれは我々の社会革命が勝利をえた時、結果としてそうなるのにすぎない。多くの場合、彼等の目的と我々の目的は根本的に異なるのであり、更に深く考えるならば、彼等は我々と組織原理を根本的に異にするのである。すなわち、自称「民主的中央集権」と「自由連合」という越えがたい溝が存在するのである。それは全く発想方法の違いであり、「民主集中」と「自由連合」を「自由連合」すると、それは後者の前者による一方的妥協あるいは屈従しかもたらさない。それが故に、我々は組織論を異なるが故にその関係の存在の可能性を全面的に否定するものである。まさしく、大衆運動相互における自由連合主義の成立は、それが故に彼等権力主義者、マルクス主義諸流派の大衆操作策動を粉砕してはじめて、歴史という大局的見地からみて獲得されるものである。それが故に我々は、経験的にマルクス主義者等の権力主義者との自由連合はありえないとみなすのである。しかしとて、我々は彼等と一切接触しないというのではない。それは大衆運動を全く無視した姿勢であり、現実的な立場ではない。彼等とは、各地域、学園、職場等における戦術的共闘はありえる場合もあるであろう。しかし、その関係は制限的共闘であり、自由連合ではありえない。まさにそれは彼等との妥協の産物でしかなく、真の自由連合とはその確認者同志の中でしか、有効性をもたないと我々は認識している。

また、誤解をまねかいたためにも一言つけ加えておくのであるが、我々は社会革命へ向けてのアナキズム運動における具体的な闘争戦術の一致を無媒介的に感情的に否定するものでもない。社会革命の前進は、最終的には我々の運動が同一歩調をとることを要請してくる可能性は十分あるし、また、それを保障する連合体の存在が必要となることは確定的である。しかしながら、それらは、我々をも含めたアナキズム運動を主體的に担おうとしている諸々のグループ、諸個人の闘いの中から必然的に生まれてくるものであると我々は確信している。そして我々はそれを目指して、

己の立脚点でその闘いを更にさらに傾注するものである。

そしてそれらを通して我々は、国家制社会解体―社会革命を目指す故に、現在のマルクス主義諸流派に比して数段出遅れている状況にあるアナキズム陣営の置かれてゐる立場を現実的客観的に認識する中から、具体的個別の反権力闘争を突破口にして、主体的に対中央権力闘争をも含めた全国的な政治的状况にも有効に対応していく主体的力量を更にさらに構築していかなねばならない。しかしそれ以上の重要性をもつて、社会革命の実現が、政治クーデターの勝利から直接的に結びつかないと認識しているが故に、我々をとりまく国家―権力のより日常的に關係している部分に対する直接行動をも含めた闘争がより恒常化、必然化されねばならないと我々は確認している。

すなわち我々の追求している国家解体、人間解放、絶対自由への悲願は、マルクス主義諸党のような中央集権闘争万能主義―軍事クーデターによる政權奪取―政治革命という路線とは全く相いれないものであり、それを我々は明確に認識する必要があるであろう。いまやマルクス主義者の路線は明確に破産を宣言された。ロシア、中国を見よ！ チリ、アルゼンチンを見よ！ 連合赤軍の破産を見よ！ 歴史はいまやアナキズムかファシズムかの選択にかろうとしてゐるのだ。我々の社会革命は、自らの存在する地域、学園、職場における恒常的永続的な反権力闘争の積み上げ、そこから始まるのである。我々はそこにおける権力および権力主義の解体という直接行動から出発し、そこにおける自由連合の大衆的獲得、その中から国家権力との対峙をつくりあげていく中で、来たるべき自由連合社会樹立へと準備するとともに、武装反革命へ反撃するのを可能とする全人民総武装体制の構築に向う。そしてそれが我々に課せられた唯一の任務なのである。

さて具体的に言うならば、我々は昨年の9・16大杉栄の追悼49周年集会を関西における大衆的再登場への最初の突破口として、次に12・9衆院選挙破産集会を貫徹し、そして今回の50周年追悼

集会と三回にわたって大衆的デモストレーション集会を貫徹した。これらを通じて我々は当面全国的、全関西的日常闘争体制―連絡体制の確立、そして更なる飛躍を獲得するために、恒常的な反権力闘争体の確立の必要性を痛切に感じているし、今後我々の保持している総力を一点それに集中するのである。

我々以上は以上の視点を踏まえつつ、今日の時点において全国のアナキスト、革命的無党派同志諸君に対し、国家解体（権力解体）、人間解放へ向けた全国的共同行動への準備を呼びかけるとともに、我々内部においても、自己の闘争原点において更なる闘争形成、主体形成を確立していく決意である。

国家、権力に包摂されている我々は、権力解体の意志を持つ限りにおいて常に同一地平にある。

それでは結論として、社会革命を追求する我々アナキズム諸集団、諸個人は今日の時点において何を為すべきか。そして何を為しえるのか。当面具体的な点にしぼって述べるならば、

一、全国的共同行動を確立するため

1 全国的、地域的な意見・情報の交流をも踏まえた思想闘争を通じての革命論、権力論、技術論等々の構築。

2 全国的、地域的な規模での課題別戦術共闘―参院選破産闘争―を形成することにより、全国的規模の政治闘争を主体的に担える力を蓄積し、社会革命の勝利へ向けて準備する。

3 国家権力、マルクス主義諸党派、反共右翼等々の我々アナキズム陣営に対する理論的・物理的破壊攻撃に対する全国的情報網の獲得と、それに対する共同防衛体制を早急に形成する。

4 現在、静岡県富士宮市に存する日本アナキズム研究センターを日本におけるアナキズム運動の発展・拡大に意義あるものとするとともに、その全国的普及、全国各地に同様のセンターを獲得し、それを通じてより広範なアナキズム運動の底辺を拡大する。

5 それらへの内実化として、当面全国共同合宿や連絡会議等

々の設定を考え、日常的な連絡を可能にする。

二、それらを保障するために

1 個別闘争、課題別闘争（地域、学園、職場における）を自然発生性にまかせるのではなく、日常的共同行動を貫徹することにより、アナキズム運動として確立するように、我々はアナキストとして主体的にかかわらねばならない。

2 それとともに、アナキズム啓蒙運動の一貫として、大衆的に公開されたりベルテル・セミナー（大衆的理論学習会）、講演会等々を大衆的に恒常的に組織することにより、それを担うべき主体を構築するとともに、アナキズムそのものの大衆による理解を獲得していかなければならない。

3 各地域におけるアナキズム運動およびアナキストの有機的結合を図るために、各地域ごとに何らかの連絡組織が当面必要であると思われる。そしてそれは我々アナキズム陣営の闘いの深化とともに、全国的連合の内実を伴った存在を保障するであろう。

4 今日、国家権力の我々アナキズム陣営に対する憎悪とそれに伴う破壊攻撃はますます強化されてきている。それはマスコミを利用したフレイム・アップとデッチ上げ策動として我々に対する攻撃として現実化してきている。しかし、この日常化した反革命攻勢に対する我々アナキズム陣営の反撃は、現在時的にはあくまでも受動的、防衛的な段階から一歩も前進していない。我々はそのような恥ずべき状況を克服し、攻撃的側面を持った救援体制の確立を獲得せねばならない。その為にも各地方における地域黒色救済を獲得、充実する中で、全てのアナキズム組織から独立した全国的黒色救援会の形成を勝ちとらねばならない。

再びくりかえそう。

求めるものは連帯であり、その方法は自由である。

国家、権力に包摂されている我々は、権力解体の意志をもつか

きりに於いて常に同一地平にある。

国家解体、人間解放、絶対自由！

ブルジョア議会制解体、小選挙区制粉砕！

天皇制解体、靖国法案粉砕！

国境廃絶、入資体制粉砕！

全国の無政府主義者、革命的無党派は団結せよ！

資料 2

アナーキスト陣営内の共働と連帯について（一九七四・九）

はしもと よしはる

一、アナーキスト陣営内の人とは

一般には戦後民主主義の風土において、今日ほどアナーキーな気分が横溢している季節はないと言われている。市民運動、住民運動、反公害、ウーマン・リブ、その他ノンセクトラジカルの運動等、その参加者の思想傾向は何らかのアナーキーなニュアンスを持つているのは事実だろう。実は、八太舟三が言ったように「茶碗と箸を持つことのできる人はみなアナーキストだ」との言葉が真実味を帯びて見えるのだ。けれどそれだけで私達の運動が何らかの進展をみただろうか。各地に網の目のような結節点ができて、地区委員会は地方協議会と連携し、地方協議会が要求して全国連合の大会をもつというアナーキストの組織図は旧態依然として私達の意識を回遊するだけである。そしてまた外発的な衝撃を受けると、私達の原理原則へ立ち戻り、組織図に従った行動を思案することになる。もし、革命者は何らの幻想を持たないのが第一の資質だとすれば、私達が依って立つのはこの現実でなけれ

ばならない。そこで私達が他に規定されるか、自己規定するかのいずれにせよ、アナキストの陣営内に留まりそこで運動を希望するなら、アナキズムでやって行こうとする自覚がなければならぬ。アナキスト陣営内の人とは、アナキズムの原理原則を受け入れ、それでも立つところの自覚者である。私達が自己に訊ね、自己を高く高めて行くのは自己の思想性であつて、それ故私達は思想の保持者（イデオログ）と自覚するのである。アナキズムは確かに倫理の感覚以上のものでしかなく、すべての理念を否定したスチルナー流のものが含まれているが、これは“個”の尊厳を強調する思想的立場であつて、個人の恣意、思ひつき、何をしてもいいとの全面肯定を主張しているのではない。もしそうだとしても、自己の行動の成果、成否は個として引き受けるのを前提にしているのだから、さうな思想を保持し、発展させる人として個の思索者（イデオログ）と認められるのである。

二、イデオロギーとは

イデオロギーとイデオログの関係について、サルトルは「過去の偉大な死者の生きながらえている思想に習熟し、それによつて自らを養ひ、未来を構築しようとする相対的人間だ」と規定している。またマルクスは、イデオロギーは分業（肉体的労働と知的労働）によつて招来され、その知的所産として“誤つた意識だ”と言ひ、大衆はイデオロギーを持たないとしている。

私の意見では、イデオログとは“理想”とかまたは原理原則である一連の仮説を受け入れ、これを實際に適用して一つの世界の構築に向けて働く人、あるいは生活の場で何らかの理念と自己同一化を図り、これを他者に及ぼそうとする人びとがそれであつて、アナキスト、マルキスト、実存主義者、さまざまなニュアンスをもつた社会主義者等はすべて“相対的な人間”としてイデオログである。つまり現実社会は、言われているような脱イデ

オロギーの時代でもなければ、イデオロギー終えんの時代ではなく、むしろそれぞれのイデオロギーが自己主張をし、一応の現実と経過を示したことによつて、相対的な均衡を微妙に保っていると思われる。

別な面から考えてみよう。マルクスが言うように大衆はイデオロギーをもっていないだろうか？ 今一般の生活感情を色と欲に根ざしていると指定すれば、それは個体の維持、種保存の生理的本能と呼ばれるものを社会的存在での条件に翻訳したに過ぎない。これはイデオロギーとは言えない。けれど、そうした生活感情の中にも善悪の判断があり、よりよい生活を求めて行動する。パターンがあり、また利害を超越した自己犠牲がみられるとすれば、そうした事象を成り立たせている理念がそこにあるとしなければならぬ。むしろ民族固有の感情とか、歴史に裏打ちされた習俗とか、共同体に特有な発想もあるだろう。しかしこれまでも、そうしたものをまとめて民衆の生活感情だけでなく行動までも指示したのが天皇制イデオロギーであつた。それ故、これからの日本に於ける反動とは、天皇制イデオロギーに収れんされるものすべて、また天皇制イデオロギーから説明される社会的措置のすべてだとみなされなければならない。その内容は、責任解除の体制であり、世襲財産制、身分差別の復活、国家神道への傾斜として現われよう。

これに関連して、大企業のエリート養成とシェア（市場占有率）拡大の在り方も検討されよう。エリートの養成は現代の高度な技術の要請とはいへ、私達の社会では就職、すなわち終身雇用の体制に組み込まれ、〇〇マンであることが一社会人であるよりも優先する。そこで封建の遺制は近代の管理様式に接木され、企業内からの告発は罪悪視される風潮さえあるのだ。ここには、個人の自由競争を容認する社会、政治的には主権在民として代議委任制をとりながら、実体では金銭、売名、術策が横行し、正しい者が正しいとされ難い頑廃が生じている。これは法の前での平等も含

めて、金銭によつて裏打ちされたブルジョア型民主主義を国是としてゐるからである。

こうみてくると大衆はイデオロギーを持っていないのは事実だとしても、大抵の場合、時代の主要なイデオロギーによるか、社会的雰囲気の中で生存しているというのがより真実ではないだろうか。(注・クロボトキンはその社会的雰囲気をつアナーキズムの道徳で満せと教えてゐる。)

ハイデオロギーの欠点とされるものV ある女性活動家の書いた戦後女性史の中に、「高揚している運動がイデオロギーを持ち込まれると途端に沈滞した」とあつた。私見では、それはイデオロギーを固定観念として捉え、その指定する行動規準を流動する現実には忠実に行使しようとする教条主義によるものと言えよう。そこで思索者には厳格な教条主義と無差別、無定見な巾広イズムが避けなければならない当面の障害である。これは「思索において懷疑し、行動において大胆になる」ことが一つの脱出法かと思ふ。

また次のように言われるかも知れない。アナーキストがイデオログだとすれば、それは知識人を意味する。一体アナーキストであるためには、ブルードンからバクーニン、またクロボトキンまで読まなければアナーキストになれないのか。むしろ本当のところは、クロボトキンを知らない者がアナーキーに行動するし、大衆は本質的にアナーキーである。

これには二つの意味が含まれてゐる。第一に知性と大衆との離反関係を示唆していること。第二に大衆の自然発生的な感情行動がアナーキーだとの認識である。

第一については既に述べた(JAFの創設可能性について)。一時代の思想と行動で示されたナロードニキの影響もあつて過度に大衆を重視するのは蔑視と共に何かの爲にする常套手段だと考えよう。少なくともアナーキズムでやろうとする自覚した人びとなら、過去の思想家の書きものに親しむだろうし、その生きてい

る思想を伝達し共に生きようとするだろう。

第二についても、もし大衆の感情行動が即アナーキーなら、既にアナーキズムの指示する世界は実現してゐるはずである。しかし実際はそうでなく、アナーキストが依然少数派であることからしてこの提言は不十分である。むしろ大衆のアナーキーな心情と行動に働きかけ、アナーキーな世界の構築に向け共に参加しようとしたのがこれまでの運動であり、これからの私達の仕事である。そこでアナーキズムでやろうと自覚した善意なアナーキストなら、出自の身分階級を忘れないだろうし、それが被抑圧階級であればその解放や地位と知性の向上が課された仕事だと知っているのだ。

三、共働と連帯と

アナーキズムでやろうとする自覚した善意のアナーキストなら、共働と連帯の効用は十分判つてゐるし、その組み方も各自のやり方で既に部分的に実施してゐる。ではここで改めて提言するのはどんな理由によるのだろうか。アナーキズムは永続革命と規定されるが、またその高揚期にはそれぞれのテーマをもつてゐた。

例えば、一九二〇年代に綱領を發表したロシアのアナーキスト達は反ボルシェヴィズム闘争を主軸にして対抗すると共に、無政府共産に立脚した当面の課題をかけた。それが「各人は能力に応じ働き、各人は必要に応じて取る」のスローガンとなり、革命における過渡期の容認になつた。その前提はクロボトキンの『パンの略取』に描かれた社会条件の容認であり、アナーキーな世界のイメージも従つてクロボトキンのそれに近かつた。これは共働と連帯を求める組織作りとして、綱領主義と名付けられてゐる。その綱領は、アナーキズムのイデオロギーに根をもち、アナーキズムのイデオロギーに集約された幾つかの当面の闘争課題と方針をたて、その成員は規約によつて行動するのが特色である。それは目的達成のための戦術を有するから、自由連合方式としても構成員に対して厳格であり、綱領承認の範囲での行動を強要する。

つまり非常の際の非常の措置であり、組織である。

わがアナキスト陣営内の一九三〇年代における綱領主義では組織系統が点と線だった。(例題・農村青年社、無政府共産党は省略)各地の意識的な活動家を中心となつて連携をうながし、連帯を深めて行き、共同討議や行動を組む方式とされていた。たの方式は問題意識をもつて個別な課題を解くのに優れていると思われるが、一般に先鋭になればなる程、排他的独善に陥りやすく、他を指して運動をしていないとか、空理空論だとかきめつけやすくなる。

むろん私の意見で、綱領主義は即武闘につながるとか、その戦闘的な姿勢のためによくないと言うのではない。アナキスト陣営内の数あるグループや個人では、読書で感銘を受けたテロリストの行動を過大に評価したり、諸外国の運動史の中にあるあれこれで気に入ったのが実施できると評価する向きもあるかも知れない。しかし明白なのはアナキズムの発生以来(G・ウッドコックはそれを一八四八年としている)体制側にある「権力」は、アナキストに最も容易に「露わな権力」を行使し得たという事実である。これは何を語るのか。

それは近代国家が歴史的に成立しようと、理性的に建設されたものであると、任意に行使する権力を保持しており、アナキズムの思想で成り立つ組織は、従つてどんな権力も発生する余地のないものでなければならぬ。

さらにわが国の民衆運動の在り方として、明治以降の在野運動―民権運動は反政府運動を主としてきた。判っているのはそれらが、主権在民としての公民権運動であり、他方に「恩賜的民権」としての立憲君主制があった。そこで聞いたりとうと努力された自由はリベティーであつて、フリーダムではなかったと言える。封建の残滓が強く、民衆は個人としての独立、自主、自由は為ととして求められても、あるもの(存在)として実体化させようとすれば、個人主義としてその利害の衝突は国力を弱めると理解され、

近代国家の体裁を備え、強力な国家を要請し、統一を主眼としていた為政者から排撃されたのである。また身分階級の温存を図り、天皇家を中心に華族をその輔弼とする体制にとつて平等は禁句であつた。明治期の社会主義は産業の近代的整備に伴つて要請された平等権の伸長をテーマにしていたのだ。

現在、私達が当面しているのは再び「恩賜的の民主主義」であり、民主主義会制である。要約すれば、藩閥政府に抵抗する代りに金銭に裏打ちされたブルジョワ型民主政府、安易に君主制を導入ないし温存しかねない現体制があり、他方にプロレタリアートの独裁を名目とした別種の権力機構が存在することである。アナキストはここでも二つの火の間に生きているのであり、その間にあつて私達が固執する堡壘は「個人の自由」である。

四、ひとりのための組織、みんなのための組織

既にみてきたように、アナキズムの求める社会は銃口や爆弾から生まれるものではなく、まして直接行動を個人的テロに限定するものではないと理解した。そして「個人的自由」がその指標だとすれば、それを実現する分野は単に経済闘争にとどまらず、社会活動、文化活動、政治活動等、私達の精神的物質的各方面での活動に拡げることが重要である。アナキズムでやろうとする自覚した善意のアナキストは各自の依つて立つ生産点で、消費点で、サービスマスターの中で、あらゆる職業の中で機会を捉え、実質的にアナキズムの理念を浸透させ、仲間づくりの輪を拡げるのだ。それは時には常識の中で、また教条的なマルクシズムの包囲の中で理論闘争をしなければならず、同じくアナキズムを公表する人びとをも説得しなければならぬだろう。形骸化したアナキズムは内部からつき崩し、再生させるのが課された仕事だから……。

そこで私達が当面する組織とはどんな形態をとるのだろうか。

綱領主義ではない別の組織づくりはアナーキズムの共働と連帯を求めるものとしての連合組織がある。(マラテスタの組織論参照) 私見では、これまでの組織の存り方で混乱するのは、この両者を混同するとか、意識的無意識的に両者を含むところから来ているように思う。つまりある人によれば、組織はガッチリしたものであるべきで、思想的に曖昧な分子は入るべきでない。そうであれば行動において責任がもてないと言う。別の人はその気質からしてカリスマ的なものを好み、運動を秘儀化したがる。より先鋭的な気分をもつ人とそうでない人、実際のな人と観念的な人、個人活動家とグループ活動家等、アナーキズムのイデオロギーを承認していてもそれぞれの発想、戦略、戦術は多様であり、多種である。そこで可能なのはルーズな連絡機関か、各人の特殊性と活動を認めた上で連合しようとの発案もあった。

「今、ここ」から出発する連合組織は、アナーキズムでやろうとする自覚した善意のアナキストが共働して「個人の自由」の伸長をテーマに、その思想の指示する反権力、反国家を基調に闘う姿勢を強めていくのだから、自然にその形態は集約されるだろう。即ち「連合」が単なる情報収集の場であるとか、個人的イニシアチブ発想の舞台であるとか、各自の運動成果の誇示に終始するとか、中央集権的センターであってはならないのは自明である。また連合のために各自の持っている個別な仕事にさく活力が、二分割されるようにも困るだろう。「連合」は一つの組織であるとしても、連合組織という名の一つのセクトに墮すとすれば、それは私達の初志に反するといわれるかも知れない。けれど全員に全身的な協力を求めて求め得ず、代りに献身的な何人かの有志によってだけ支えられる組織とは何んだらうか？ 権力の発生する余地のない組織は同じく犠牲を求めることの少ない組織である。それは会員相互のチェック・アンド・バランス(吟味する平衡感覚)の行きわたった組織であり、会員の帰属意識によりかかるのでなく、運動母体として、会員の意志と行動で支えられなければいけ

ない。また各自の意志と行動を調整して、幾つかの集約的な参加しやすいテーマを創造し得る組織でなければならない。私は意識して他人を利用することと、利用されるのは好まない。それ故、「連合」は腐肉に集まる禿鷹のエサ場とか、野合の場ではなく、旗印を鮮明にして、納得した人びとが集まる堡塁としたい。

そこからは統一見解や統一行動は出にくい、集約的な見解と行動がそれに代わるだろう。しかし発言者や行動を共にした人びとが、責任をもつて持場に在るのだから、活力の溢れた組織になるだろう。組織の調和とは批判や反対のない無気力な平和を言うのではなく、内部において建設的な批判、反対がでて対立しても、いざれ調整できる組織である。その場合、理念からでない、個人的中傷や悪罵は論外である。

以上、私はこの交流会にのぞみ、日頃考えている諸項目を組織作りに焦点をあてて述べた。現状から出発するには、私自身処理しておかねばならないまとめであり、ご出席の諸君には何かの参考になると思う。要するに人私はかような考えをもって組織作りに参加したいVとの願望なのだ。そしてこの認識に加えるとすれば、マラテスタが指摘しているように、組織といえども絶対的恒常的なものではなく、協力を約束した人びとが離れるとか、流動的な現実に対応できなくなれば、その組織を解散して、能力があり共働と連帯のできる同志達の間で新しい組織を作ればいいのである。組織は人であり、面従腹背で維持されるものではない。ましてや名目だけの連合であってはかえって運動を悪化させる恐れなしとしない。

ひとりの孤立したアナーキズムの自覚者のために有効に働き、またアナーキズムでやろうとする多くの自覚者が共働できる組織、それが私の希望である。

(注および規約試案は省略)